

第12回学校関係者評価委員会議事録

開催日：平成31年3月6日18時30分～20時30分

開催場所：専門学校 社会医学技術学院 大会議室

出席委員（敬称略）

小林 一久 （保護者・医療法人社団東桐会調布病院 リハビリテーション科長・理学療法士）
杉村 夕 （外来講師・本学院臨床心理学担当）
西村 和美 （高等学校・東京都立昭和高等学校進路指導担当）
西本 典良 （就職先・小金井あんず苑・理学療法士）
花宮 豊 （外来講師・医療法人欣助会 吉祥寺病院・作業療法士）
濱野 智徳 （地域・濱野公認会計士事務所）
濱松 俊彦 （自治体・小金井市保健福祉部 介護福祉課 包括支援係長）

欠席委員（敬称略）

大関健一郎（卒業生・帝京科学大学医療科学部作業療法学科・作業療法士）

事務局出席者

山田千鶴子（専）社会医学技術学院 学院長
帯刀 隆之（専）社会医学技術学院 副学院長
中村 伴子（専）社会医学技術学院 副学院長
遠藤 敏 （専）社会医学技術学院 キャリア支援室長
和島 英明（専）社会医学技術学院 理学療法学科長
河野 達哉（専）社会医学技術学院 作業療法学科長
清水 茂 （専）社会医学技術学院 事務長／自己評価委員長
福井健太郎（専）社会医学技術学院 作業療法学科教員／自己評価委員 書記
深井 牧子（専）社会医学技術学院 事務職員

【議事録】

1. 学院長挨拶（山田）

学校法人化についても含め挨拶。

2. 議長の選任（清水）

互選で花宮委員を議長に選任した。以下、議事次第に従い議事が進行された。

3. 前回議事録の確認（署名人：西本委員、花宮委員）

議事録及び学校関係者評価報告書を Web 上で公開することの承認を得た。

4. 学校関係者評価報告書の作成について

5. 以下、学校関係者評価報告書（案）について、基準ごとに確認、意見交換を行った。

●基準1（教育理念・目的・育成人材像）について

特になし。

●基準2（学校運営）について

特になし。

●基準3（教育活動）について

山田：西本委員から、理論化および内外に影響を与える教育活動の実践について意見をいただいた。

そこで、新年度からの委員会において、教員の研究を推進する委員会を設けた。

●基準4（学修成果）について

西本：卒業後だけでなく、普通の学生生活でできることはないのか。

和島：理学療法学科のカリキュラムにおいて、各学年をまたいで交流する授業を設けている。国家試験に合格する力をつけるというより、社会人となったときに社会の中でいかに貢献していくかを意識している。

河野：作業療法学科では、各学年をまたいだ組織を5～6年位前までつくっていた。もう一度、違う形の復活を検討している。

先日、2年生の検査測定実習前に1～3年生を講堂に集め、1年生が被験者、2年生・3年生が検査者として参加し、練習する機会を作った。結果的に非常に良い交流となった。今後も続け、定着させたい。また、いろいろな形で各学年の交流を図っていききたい。

濱野：国試の合格率が下がってきているのではないかと。H29年度は16名受からず、就職もできなかった。次の国試までの1年間、学院はどういった対応をしているのか。

帯刀：既卒者に対しても門戸を開いており、学習計画を立てつつ、教員の担当をつけて対応している。卒業生のほうが在校生より経済的に苦しいこともあるので、新たにアルバイトをしながらの勉強となるが、本来は勉強一本が望ましい。秋までには勉強を促し、計画を立てながら最終学年のプログラムと合流して国試対策を行っている。

受験生のほうで勉強する気持ちになってくれれば、策は講じている。

濱野：学校は既卒者にも開放しているのか？

帯刀：開放している。在学生用に国試対策の分野別勉強会を10回程度開いているが、既卒者も参加できる。過去問のテストをスマートフォンで確認して勉強できるシステムも取り入れており、費用は学校で負担。模擬試験も学校で実施している。

西本：国試対策に既卒者はどれくらい来るのか？

帯刀：半数くらいだが、模試のときは、3分の1程度出席率になる。

濱野：昨年卒業した16人の不合格者の結果はどうなっているのか？

帯刀：昨年落ちた人はほぼ、全員合格するのではないかと。ただ、3～4浪の人は厳しい。

山田：在学時は夜間部のほうが合格率は高いが、卒業後は夜間部よりも昼間部のほうが高い。

帯刀：夜間部は仕事中心になりやすい。できるだけ翌年には国試に通れるように対策を考えている。国試対策の費用を学生負担としている学校もあるが、当学院では考えていない。

●基準5（学生支援）について

西村：高校生で不穏な子が増えている。それにより大学進学が難しい場合、親、担任がスクールカウンセラーを入れて面談をしている。高校への進学時に中学教員から発達障害等、学生の様子が記入された書類が来るが、近頃、進学先（大学）からも同様の書類を求められることがある。受験生にとって不利に働くと思い、明記して提出することは行ってこなかったが、情報は出す傾向になっている。

山田：学院の立場として、得られた情報を理由に入学は断ることはないが、教えてもらえると学院

の教員も助かる。

河野：受験者の中で自分の履歴書に発達障害と書いている場合もある。一方、高校からの内申書には「おとなしい子」としか書いていない場合もある。

発達障害かどうかというより、どう成長してきたかの方が大事だ。自分から発達障害であることを伝えてきた学生が今年度受験した人の中にもいるが合格としている。

山田：作業療法学科の教員が高校訪問へ行ったときに、当学院へ入学している学生の家庭状況を聞くことがあった。そういった情報を高校側が話してくれると、大きな問題が生じる前に対応できるのでありがたい。

西村：児童相談所に相談する場合もある。高校ではこれまで「生徒に不利になることはなるべく書かない」という傾向だったが、高校から進学先に学生の情報を伝えることは良いなのかもしれない。

山田：昨今は、親子関係が難しいように感じる。親と子が逆転しているような、子が親を気遣ってというケースが多く、問題が大きくなったときに学校が知ることになる。もっと早い段階に介入できなかったかと思う。

西村：高校と専門学校の間で情報交換できるとよい。

杉村：大学で学生相談を行っていると、本人が「自分にはこういう配慮が必要」と話してくる場合がある。学生が不利にならないように大学教員も考えている。

社医学は、先生方の学生への支援がとても配慮されているので、カウンセラーから教員へ引き継いでくれる。そういったケースが増えると良い。

西本：実習先も同じで、学校以上に情報が来ない。さらに、期間が短い中で一定のことをしなければならない。そのあたりの学生へのサポートをどう考えたらよいのか。

山田：われわれの立場では、情報をもっている実習地に伝えてよいのか悩む。個人情報のため、学生が実習地へ伝えないでほしいと言われることもあり得る。

西本：養成校が増える中、実習先も多く多くの学生を見ている。学校側も実習先で誰が実習指導者（SV）になるのかわからない。よって、配慮が必要な学生を誰に担当させるのか、別枠で考えないといけないのではないのか。

山田：昔は実習先をお願いする場合「成績が悪いから」という学生が多かったが、最近はメンタル面の弱い学生が多い。

西本：SV があまり援助しすぎても、次の実習先で苦勞する。実習先は学校よりも大変だ。

花宮：今後の課題である。

●基準6（教育環境）について

花宮：SV の研修はどうなっているのか。

山田：指定規則の一部改正で、SV 用の講習を夏頃から行わなければならない。

中村：PT・OT の指導者向けの研修会もあり今後、本校でも数回の研修を企画している。

山田：SV の金銭的負担はほぼなく、基本的には学校側の負担となる。

中村：SV 用の講習は合計で16時間以上。土日に実施している。

花宮：講習を受けた指導者は一施設一人でよいのか。

中村：指導に当たる人は講習を修了している必要がある。

山田：学校としても、実習先の皆さんが講習を受けるよう促していく。全国共通の内容であり、講師養成の研修会も来週から全国で行われる予定。実習ではクリニカルクラークシップが推進されており、それにより実習指導も楽になるのではないだろうか。到達レベルが学校ごとに変わらなくなり、実習側が成績をつける負担もない。一人のSVに2人の学生が

推奨されている。基本的には考え方を教えるといったもので、レポートのフィードバックも減るものと思われる。

濱松：(ニュースになった公立大学での)蔵書の焼却について、社医学ではどうなっているのか。

花宮：小金井市から援助等できないのか？

濱松：社医学の蔵書は充実しているので、処分の仕方先生方が理解できるものにしてほしい。

山田：当校では、不要な本は学生に自由に持っていきもらい、残った本を廃棄している。

西村：残った本は高校生が来た時に、渡してもよいかもしれない。

●基準7（学生の募集と受入れ）について

西本：全額自費でリハビリを受ける人たちがいる。そのような患者さんを学校で勉強させてもよいのではないかと。治療ではなく、障害をどうとらえるかといった、社会人プログラムが考えられないだろうか。

高校の先生には、様々な学校から毎日のようにパンフレットが送られてくるので、高校訪問をしても実際の効果はどうのだろう。違う切り口はないだろうか。

小金井市の施設に行くと、利用者の多くは市内に社医学があることを知らない。大人に認知を高めることで、時間はかかるかもしれないが学校の存在が子や孫に伝わっていくのではないかと。

山田：驚くほど地域に知られていないので、今年は地域貢献委員会が働きかけていく。

遠藤：小金井市の身体測定に、学生も参加する活動を始めた。

西村：多摩地区では、私たちの年代の先生には社医学の名前は知られているが、今後、多摩高進の先生も多く入れかわる。若手教員への世代交代で、社医学の知名度、良さが伝わっていくのか不安である。養護教諭への働きかけも良いのではないかと。養護教諭には、細やかな研修を行っていることが響くかもしれない。

山田：伝える内容としては学校についてか、仕事についてか。

西村：両方。高校の先生と面談をして話していくのが大事。養護教諭を対象に、というのもよい。

西本：学生を連れて行くとよい。

山田：医療機関でもそういった要望がある。

●基準8（財務）について

濱野：全体としては健全な状況。話にあがった蔵書について、学校法人では固定資産になる。現在、5,800万円ほど計上され、固定資産全体の4%くらいを占める。「除却」といって、廃棄する場合は単品管理または、総合償却の方法がある。学校法人会計をする際に検討していけば良いと思う。蔵書が増えすぎているのであれば健全とはいえないので、償却していくことも検討する必要があるが、現状は今のままで大丈夫だろう。

●基準9（法令等の遵守）について

花宮：ハラスメント対策が重要だが、どういった面で苦勞をされているのか。

山田：学校ではハラスメントに対する共通理解が進んでいるが、実習先のハラスメントはなくならず、どう伝えていくのが問題である。そういうケースが発生すれば伝えることが必要だが、デリケートな部分でもあり、対応に苦慮している。

中村：問題が発生したため実習施設で話を伺うと、不適切な対応があったことを認め改善してくれたが、学生にとってはそれが原因で次の実習に影響があったという。学生が気持ちを収めるのも大変なので、そういった場合の対応が難しい。

杉村：学生からの話を聞くだけでは実際のやりとりはわからないが、本人が傷ついているのであれば、きちんと対応しなければならない。社医学の相談室では、つらい思いにじっくり聞いている。実際に対応する教員は大変だと思う。

河野：何かあれば、学生は「実習評価が不合格になる」と思ってしまう。学校が介入することで評価が不利に働くことを想像し、「そっとしておいてください」と我慢してしまう。

デリケートな問題であり、それによって学生が実習中に受けたものはなかなか払しょくできないのではないかとと思う。

中村：実習指導施設から「既往がある学生は教えてほしい」と言われるが、学生の了解を得られないと伝えられないジレンマもある。教員の説明だけではなかなか伝わらないので、困った状況に対しては教員が足しげく通うしかない。

花宮：既往が実習中にわかる場合と、実習前にわかる場合もある。

中村：学生の意向を聞きながら対応してほしいという場合はすぐ対応できる。学生が「調整してほしい」という場合は良いが「ちょっと待って欲しい」という時が難しい。

和島：マスコミでもしきりに伝わっているが、SV に対してハラスメント防止を啓発していくのも大事であり、そういうことが起きない環境を作っていくことも大事。指導者もしくは学生が複数いることで予防していくのも大切だ。

中村・山田：指定規則の改正では、1対1で向き合いすぎないことを防ぐ目的もある。

●基準 10 (社会貢献・地域貢献) について
特になし。

●その他 西村：学生募集にも関わるが、来年でセンター試験が最終年度となり、次から新しい入試となる。センター入試最後の年は、浪人を避けたい生徒が多く、成績が中間層から下の学生は進学先を早く決めようとすると思われる。夏から秋の動きが早くなるかもしれない。専門学校としてはどっちを狙うのが良いか。早めの募集に力を入れるのか。冬に「良質な専門学校に行きたい」という学生をターゲットとするか。行き先がはっきりしている学生を早めに決めるか。

山田：両方に向けて準備していく必要がある。

花宮：来年度に入職する教職員はいるのか。

山田：来年度から採用の教員は、4名中3名が社医学卒業。特に意識しているわけではなく、たまたまそうなった。

花宮：良いのではないか。

山田：、社医学以外の教員とのバランスが大事だと思う。現在は、半々くらいの割合になっている。

6. 来年度委員会の活動予定 (清水)

現委員は来年度まで委嘱している。

来年度委員会は9月、3月に開催する予定。

令和元年 9月26日

議事録署名人：

西本典良 

議事録署名人：

濱野智徳 